

む つ み

2 8 6

日本国語教師の会「樺の会」

第五十六回 日本国語教師の会「樺の会」

東京WEB大会 報告号

わたくしども日本国語教師の会「樺の会」は、長い歴史を持つ国語の研究会です。月例会は七月で五〇七回を数えました。そして夏の大会は、今回が五六回目となります。実は昨年は、岩手県の陸前高田市で夏の大会を開催する計画を立てておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大により中止延期といたしました。感染対策で様々な制約を受け「これからの学校の授業をどのように展開していくべきか」という根本的な課題が生じました。本会は国語の研究会です。今とこれからを考え「これから先の国語の教室をどう作っていくか」ということを探っていく必要があります。そこで、この夏はオンラインによる「東京WEB大会」を開催する運びとなりました。

教師の一番大事な仕事は、授業を通して子どもたちに様々な力をつけていくことです。本会は「吾以外皆我師」をモットーとしています。参加する方々全員でこれから先の国語の教室を考えてまいりましょう。

日本国語教師の会「樺の会」東京WEB大会

一 主題 ことばを育て人間を育てる

ーこれから先の国語の教室を考えるー

主催 日本国語教師の会「樺の会」

二 とき 二〇二二(令和三)年八月七日(土)

一〇:〇〇～一六:〇〇

三 ところ お茶の水女子大学附属小学校

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

FAX: 03-5978-5872

※Zoomによるオンライン開催します。

申し込まれた方にURLを配信いたします。

※「こくちーず」から日本国語教師の会でイベントを検索してください。

大会参加費は無料 大会申込は必要

大会冊子が必要な方は一〇〇〇円(送料込)

四 日程

【午前の部】八月七日(土) 一〇:〇〇～一二:〇〇

1 入室準備 九:四〇～一〇:一〇

2 開会式 一〇:一〇～一〇:二〇

司会 鈴木 まゆ子(東京)

① 開会のことば 大会事務局 若林 富男 (東京)

② 大会運営の連絡 大会事務局 廣瀬 修也 (東京)

3 はじめの話 一〇：二〇～一〇：四〇

大会委員長 片山 守道 (東京)

○本大会テーマについて

・Education2030では新たな価値を創造する力、対立やジレンマを克服する力、責任ある行動をとる力が大事な力である。Society5.0(超スマート社会)では、ビッグデータをもとに個別に対応できる社会といわれている。

○国語の教室のこれまでとこれから

・教師の願い、教材研究、授業構想のもと行ってきた授業↓子どもが学びたいことを学びたいように学ぶ。このままで言葉の力が育つかは考えなければならぬ。↓一人一人の学びに寄り添いながら、教師として綿密な教材研究のもと、場に応じた適切な刺激、子どもの学びに向かう手立てを考えていく。

○大会のねらい

・二つの分科会では、カリキュラムマネジメントを大事にして、どのように子どもの学びを作るか、「自由に生きる」ためにはどうすればよいのか、学びのモチベーションをあげるために教師がどのような仕掛けをすればよいのかを考えていく。

・パネルディスカッション。GIGAスクール構想がコロナ禍で進む中、具体策は？今求められる言葉の力とは？一つのツールとして便利な「AI」の功罪は？

・まとめの話と閉会式。自分なりに一日の学びを振り返り意味つける大切な時間。これから先の国語の教室とは、子どもの将来を見据えた国語の教室。答えは一つではないが、それぞれが見出しがいけるとよい。これからの教育で、オンラインでできること・できないこと、学校で集まることのできることでできないこと、可能性と限界がある。どうしたらよいか考えていきたい。

【記録 前原 文江(東京)】

4 入室準備 一〇：四〇～一〇：五〇

5 実践報告分科会 一〇：五〇～一二：〇〇

◆下学年分科会

司会 下脇 陽子(東京)

スタートカリキュラムから学ぶ国語授業のこれから

『できる』のオートメーション化を促す『カリキュラムマネジメント』

昭島市立光華小学校 安藤 浩太 (東京)

○単元学習の概略

国語授業の導入時期において、幼児教育の視点である日常から生まれる無自覚な言葉による学びや、言葉そのものの学びを自覚化させたい。そのために、生活科を中心とした合科的・関連的な指導が図れる単元構想にした。

(1) 無自覚な言葉の学びの自覚化

生活科の学習単元「どきどきわくわく学校探検」を、他教科と合科的・関連的な指導を図り、単元配列をした。国語科に関して、自らの言語生活を振り返り、言葉の働きや特徴を自覚化し、それらの言葉の気付きを関連づきながら学びを深めていく。自らの言葉に関する問題が解決できるようにした。

(2) 国語科が「言葉の学び」であることの自覚化

国語が「言葉の学び」であることを自覚できるように、活動や学んだことを振り返る時間を設け、学びの対象を自覚化させる。そして、各教科へと次第に分化していくようにした。

○単元学習の実践

(1) 活動の振り返りや次の作戦を考えることを通した、言葉の自覚化

・話し方・聞き方の学習へ
自分の言葉が相手に伝わるようにするために必要なこと、相手という条件によって丁寧な言葉を使うということ、時間帯という条件によって挨拶が異なるということなど、言葉の働きに注目させる。日常の挨拶の場面や、これまでの経験を振り返り、共有し、言葉を自覚化させる。

・名刺作り・文字の練習へ

自己紹介をする時に、話して伝えるだけでは忘れてしまうため、紙に書いて残してもらえばよいということに気付かせ、言葉の働きに注目させる。

(2) 対象ごとに自覚化

・話す・聞く／読む／書く」が言語活動であることに気付かせ、それらの活動を「国語」の授業で取り組もうと意識づけさせる。学んだ喜びや実感をもてることで、「もっとできるよ」になりたい、「もっとできるようになりたい」と思うようになれることができる。

○成果

児童の日常生活場面と結び付けたことで相手意識が明確となった。また、言葉に対する気付きが関連づいたため、日常生活でも活用できるほど言葉に関する学びが深まった。「できない状態や困っている状態からできるようになりたい。」と自分の現状から問題を見つけて解決しようとするつながりのある学びが実現できた。

○提案

子どもたちが日常の文脈から「言葉の問題」を自覚化し、考える必然性が生まれるような活動、そしてそれを活用できる場を設定する。これらによって「できる」のオートメーション化を促す「カリキュラム・マネジメントの重要性」を提言したい。

○話し合い

・板書について

↓子どもの声が多く書かれている。情報量が多いが、「作戦を立てる」「探検に行くための練習」「振り返り」の三回に時間を分けているため、児童が一度に見る部分はそれほど多くない。図や絵を使って概念化するように心がけている。

・スタートカリキュラムの学校内の周知

↓前年度の入学対策委員会で提案をしている。一週間ごとの計画を出し、周知をし、校内研修をしている。大事にしたい児童の姿を教員で共有する。年間を通してシステムを作っている。

・児童の個別対応や個々の子どもの見取り

↓学校探検を複数回設けることで、初回は教室の中の探検だけだった児童も、一か月後には行けるようにしている。学校探検中の子どもをつぶやきを付箋に書いたり、写真を撮ったりする。メモをしている児童もいる。また、支援員や補教をつけ、手厚い人員体制を作っている。一学級の人数が三十人を越えると、一人ひとりの見取りが難しくはなり、人員配置も難しい面もある。

・子どもの（教科）学習への期待に対して

↓はてな・困ったことを解決していくことが「学び」であると考えを変えていきたい。入学時、「のんびりタイム」「なかよしタイム」「わくわくタイム」「ぐんぐんタイム」に分け、教科学習は「ぐんぐんタイム」に取り入れている。

・自覚化させる、振り返りをするためのアプローチ

↓意図的に必要なタイミングで行う。気付いたことを写真で撮る。付箋を渡してあげて、思い出させる。効果の実感をさせ、「こんな学習をしたから、できる

ようになったんだ！」と思わせるようにしている。

・計画とのズレ

↓学びの種を仕込んでいるため、大筋から離れることはほばない。校長先生や用務員さんにも子どもたちが目にするように、事前に頼んでおく。

・生活から学ぶカリキュラムはいつまで続くのか

↓カリキュラムマネジメントは、どの学年でも合科的・関連的に行っている。

◇特別発言

成田 信子 (神奈川)

○安藤先生の実践について

・スタートカリキュラムを通して国語科を自覚化させるための工夫がされている。子どもの知りたいことや子ども側の「どうしたらいいか」という学びが、顕著な形となる合科的・関連的なカリキュラムマネジメントになっている。

・教師の仕掛けや気付いてほしいことが散りばめられている。子供に寄り添い、その中に教師側としては教科のねらいがある。教師によっての価値だけでなく、子どもにとっても価値のある学びになるために考えられている。

・オートメーション化していくことがゴールではなく、自分がどうやって立ち止まるのを考えるのも必要であるだろう。

○就学前の学びから、小学校の学びへ

・就学前教育の考え方は、経験的や偶発的に学びを引き出していくもの。小学校教育は就学前教育の考え方もっと学ぶことがある。

・小学校では「ちゃんとできる」を以て、ととのえていく。そこでは、どこまで引き上げられるかと個に寄り添えるかが大事になる。

○言葉の学びを自覚化させる難しさ

・他教科/他領域の「どうしたらよいか」という課題解決の枠組みでは共通している。ただ国語科では母語という環境の中で自然に身につけてきたものが対象である。それを自覚化させて、もつとできるように考えさせることは難しい。国語科においては、自らの言語活動について自分が今どういう状況にいるのかを自覚化することになる。

・自覚化という考え方は、母語であることが前提とある学びの在り方であるが、日本語の習得の面もこれからの国語科を考えていく上で課題となる。

○相互作用の中で学ぶ

・自分の言語活動が鏡のように返ってきて、自らができるようになったことを自覚できる環境が大切になる。相手を想定して自らがもの・こと・ひとにはたらきかけるだけでなく、はたらきかけられることを自覚する。

・相手とのやりとりの中で深まってくるときに、言葉は思考や感性といった内面まで関わっていく。自分がどうやって使って、どう受け止めていくのかを考えていくことになる。

【記録 卯田 ひとみ (東京)】

◆上学年分科会

司会 廣瀬 修也 (東京)

個別最適な学びと協働的な学びの実現を目指して

～自己決定とフィードバック～

埼玉大学教育学部附属小学校 吉野 竜一 (埼玉)

○単元学習の概略

授業の在り方として「全てのこどもたちが、生きたいように生きること」を最も大切にしている。本実践は、子どもたちの「自己決定」を軸に進んでいる。

具体的には「なぜ学ぶのか」という目的の自己決定、「どのように学ぶのか」という方法の自己決定である。その自己決定に対して寄り添う形で「個に正対したフィードバック」を行う。今回の実践は「メディアと人間社会」「大切な人と深くつながるために」「プログラミングで未来を創る」(光村図書)の説明的文章教材である。

○単元学習の実践

《0～1時》これまでの学習を振り返る。教科書の扉のページを読んで、学習計画を立てる。自分が読みたい文章を決める。

《2時》「プログラミングで未来を創る」を読み、筆者の主張と工夫を見つける。

《3～7時》各自、選んだ教材を読み深め考えをまとめたり、共有して広げたりする。いつ、誰に、どのように関わるかは自己決定する。※個別化ポイント《8時》共有し、広げた考えを踏まえてもう一度自分の考えをまとめる。単元の振り返りを行う。

○実践の考察と提言

実践を終えて「協同化」については、ゆるやかにながら、必要な時に他者と関わることができた。「個別化」については甘い点があった。一人一人が自分に合った学びを進めることが課題である。

現時点では、「学びの個別化・協同化・プロジェクト化の融合」が大切だと考える。すべての子どもたちの将来を真剣に考えたときに、何が必要なのか、教師の役目とは何だろうか。

○話し合い

・読みの共有について

↓人それぞれ違っていた。毎時間話し合った児童もいれば、一人読みを続けた児童もいる。

・個々の見取り(読み方)について

↓毎時間ワークシートに記入し、回収(スキャン)していた。これからはICTの効果的な活用が考えられる。

・ゴールの設定(評価)について

↓学習指導要領の指導事項に沿って評価している。しかし、児童にとってのゴールは各々が設定したものであった。教師と児童の目標が合致していたかは疑問・反省点である。

・テーマ「生き方」に対する教師のアプローチの仕方について

↓35人全員が同じように学習に対する思いがあったわけではない。「生き方」というテーマに対して、近い未来と遠い未来の両方を考えられるように想像させたり声掛けをしたりしていた。今後、教科の枠を超えるプロジェクト化

が児童の「やりたい」につながるのではないだろうか。

・個別最適な学びについて

↓考えを表出するツールとして、チャットで書き込み、直接対話、教師による意図的な掲示を行った。児童が自分に合うツールを選んでいく。

・対面ではできないこととの線引き

↓チャットでは、自分に言われている実感は無いようにも見えた。直接話すことで伝わることや、教室で話すことで周囲の児童への波及がある。

◇特別発言

○個別最適な学びとは

・指導の個別化と学習の個性化

・児童生徒が自ら学習課題や学習活動を選択するなど、児童生徒の興味関心を生かした自主的・自発的な学習が促されるように工夫する。子供が自己調整しながら学習を進めることが求められている。

○協働的な学びとは

・個別最適な学びが孤立した学びにならないようにすること、自分の存在が認められたり、自分の活動によって、何かを変えたり、社会をよりよくできるという実感をもつことが大切である。

・主体的に学びに向かい、学んだことを人生や社会づくりに生かしていこうという意識や積極性につながる。

○吉野先生の実践について

・自己決定とフィードバックが位置付けられており、授業を学ぶ側の論理から再構築している点が素晴らしい。

・教師は、子どもが自分でわかるようにすることを触発することから、「わかりたい」という思いを育てたり、疑問をもたせたり、みんなで学ぶ楽しさ・知的充足感を味わわせることが大切である。

・児童が教師の予想を超える学びをしていた。具体的には、教科書教材以外を読んだ児童は、自分の考えや経験と比較し、簡単に納得しない姿が見られた。

○ここでの「共有」が深めるポイントだったのでないだろうか。

○私たちが考えていかなければならないこと

「言語能力の課題」「情報活用能力の課題」

・教師の役割は、言葉に立ち止まり、根拠を明確にすること。
・教室で学ぶからこそ、読みのミスがあったとき、教師が立ち止まり、児童に

対して、読みを掘り下げることができる。

・教室には様々な学びのタイプの子どもがいる。活発に発言する子が深い学びをしているわけではない。対話的に組み込むためには教師の関わりが必要。

・深い学びを導く教師の役割⇨対話のポイントを絞る力

・個々の意見をどの場面でもどのように取り入れるかを見極めて他教科との関連を計画的に生かすことが大切である。

【記録 今井 佳奈(埼玉)】

6 昼食 一二：一〇～一三：一五

【午後の部】八月七日(土) 一三：三〇～一六：〇〇

1 入室準備 一三：一五～一三：三〇

2 パネルディスカッション 一三：三〇～一五：二〇

◇テーマ「ことばの力を育むICT機器を活用した学習づくり」

◆コーディネーター 岡田 博元(東京)

◆パネリスト 内丸 友之(茨城)・曾根 朋之(東京)・渡邊 光輝(東京)

*コーディネーターより

◆岡田

○テーマ設定の背景

・文部科学省は、Society 5.0に向けて「個別最適化された学び」を目指す方向として位置付けている。実際は、日本の子どもはICT活用頻度は、諸外国に比べて遅れてしまっている。

○アントレプレナー(起業家)的主体として要請されるもの

○実践から考える視点

・ICTを使う主体はだれか・その目的は何か。

・ICTの活用は、個別化を促すか・協働化を促すためか。

*パネリストより

◆内丸

ことばの力を育てる「ことば」を活用した学習とは
様々なアプリケーションの活用を通して

○実践の特色

- ・「えじとりICT教育」を通じた学習活動の充実。クラウド上のプラットフォームを利用・タブレットPCによる探究的な学び。
 - ・「ICT活用による『さらにわかる授業』の実現と学力の育成。様々なツールを使った学び・タブレットPCによる協働学習。
 - ・小・中・高一貫教育を見据えた多様な学習活動を実施。
- 『ひとつの文具』として児童・教師が扱うことのできるアプリケーションの活用を通して「スタディ・ログ」の蓄積と共有を提案。ただし、ICT機器の活用とノートのバランスを考える。

◆曾根

機器の活用によって「変わるもの」と「変わらないもの」

- 「変わるもの」：一人一台端末やツールで効率化できること。
「変わらないもの」：教師の知恵・力量や授業づくりの本質。
 - ことばによる見方・考え方をいかに教え、自覚化を促すかということは、教師として忘れず、大切にしたい。
- 【『スイミー』（二年）】の実践
- ①「考えの共有」
 - ・一言感想をFormsで出し合う。「音声入力でも可」
 - ・一覧になった一言感想を分類する。
 - ・分類した視点ごとに、スイミーの魅力を考える。
 - ➡全員の考えを反映。自己決定感が生まれ、「次は…」という、見通しをもった単元になる。
 - ②「深めるための共有」
 - ・話し合う前に共有ツールを使って友達の考えに目を通しておく。
 - ・スイミーの魅力をまとめたノートをgoogle driveで共有。

➡視覚的に理解しやすく考えのずれに気付くきっかけに。
着目させたい視点を教師側が多く持つこと。

- ③「振り返り」の視点から
 - ・学びの履歴を整理しながら残すためにICTを活用。振り返りの材料をデータとして残し、整理しながら共有できる。情報は増え、必要に応じて引き出すことができる。

・この教材で何を学ばせるか明確にしておくことが大切。
(例) 形式的な視点(たとえ)・用語(区切り) など

◆渡邊

一人一台端末環境で国語の学びはどう変わるか
境界の融解と葛藤と

- 一人一台端末の環境ではこれまでの学びを構成してきた強固な「境界」が揺さぶられ、多くのジレンマを生起させる。そして、国語教育のあり方を問い直す契機となる。

例：Puentedra(2010)のSAMRモデル

- ①「走れメロス」の魅力を探る【の実践(全6時間)】
 - ・作品の魅力を引き出す問いをJamboardに書き出して検討。
 - ・問いに沿って読み深め、グループでスライドを共同編集。
 - ・「メロスの魅力について語る」個人でまとめる。
- ➡一人一台端末による「ネットワークを活用した全員参加の協同的な学び」を目指して行った。ただ、「誰が書いたか分からない」ため、どこまでを個の学びとし、評価するか。「自他の境界」
- ②【敬語ワンポイントレッスン動画】の実践(全6時間)
 - ・敬語について、教科書や日本語教育のYoutube動画で学ぶ。
 - ・グループで敬語を使ったミニドラマを作り、撮影・編集する。
 - ・完成した動画を互いに見合う。
- ➡メディアは、生徒が情報を受容する手段としてだけでなく、学習を表現する手段としても活用される。「教材の境界」

③【デマ・フェイクニュースを捕まえる！】の実践（全8時間）

- ・メディアの特性をグループでスプレッドシートにまとめる。
- ・グループでデマについて分析、ポスターを共同推敲、発表。
- ・個人で「メディアとの付き合い方三条」と解説をまとめる。
- ・ゲストティーチャーによる特別授業（オンライン）。

➡教室の壁を超え、他クラス、他学年、学校外との交流が容易に。学習塾等で、リモート授業、動画配信や、AIドリルが一般化すると、ますます「なぜ教室で学ぶのか」という問いが顕著に。

*フロアからの意見・感想（主なもの）

・従来の「書く力」の中には表現としてのデザイン性（アピール、レイアウト）などはあまり意識されていなかったと思うが、端末に打ち込むのも一つの「書く力」。映像表現も同じ。このように、思考・探究力にしても書籍によるものから、より多くの専門的な知見にアクセスできる環境の中の学びは新たな学びの姿。つまり、それを新たな「学力」として再構築していくことこそが、未来志向的な考え方ではないだろうか。学力の定義自体がGIGA以前と同様のものであってよいのかという問いも、同時に出てくるのでは。

- ・教師にとって、一覧化できることで子どもに対しても個別対応しやすいが、短時間に行う場合は能力が求められるので、事前に予測して分類する等の手立てが重要。一方、子どもにとっては、大量の情報を処理することは困難。情報を選び出し、組み立てる力が求められる。積極的に友達の情報を読みたいと思わせるような立場の違いなど、可視化しておく工夫が必要では。
- ・ICT教育の必要性は感じるが、教師への研修時間の保証や支援を求む。
- ・メディアリテラシーはICTも紙の文化も含めて小さい時から計画に学んでいくことが大事。情報活用能力も国語科に期待されている。
- ・ICTはただ使うのではなく、授業・単元においてどの力を伸ばしたいのかを考えて計画的に活用すべき。GIGAや一人一台端末という言葉に踊らされず、効果的な活用方法を検討したい。【記録 下脇 陽子・前原 文江（東京）】

5 まとめの話（総括講演） 一五〇～一五五

濱田 芳子 （神奈川県）

《学んだこと》

○コロナの中で実施できないと思っていた本大会が、大会としてできた陰には、事務局の先生方のご努力あってこそ、と感謝している。

○片山先生のはじめの話を聞いて、今の子ども達は生まれた時からタブレットに関わっているので、大人よりも抵抗なく、意外と簡単にSociety5.0超スマート社会に近づけるのではないかと思う。

○分科会では、下学年、上学年共通して、教える授業ではなく、子どもが自分で学び取る授業の提案で、どのように取り組んだかを丁寧にし、そこにICTを活用する良さを盛り込んだ、とても参考になる実践だった。

下学年（安藤先生）は、学びの主体である子どもに自覚することを育てようという実践。人に会ってうれいから挨拶したい。それを意味づけて言葉の力を獲得していくという発表。自覚させる意識は小さいうちから。

上学年（吉野先生）は、なぜ学ぶのか、どう学ぶのかを自己決定させるために、教師が単元の作り方を調整し、サポートしていくという実践。一つの単元で達成できなくても、友だちと共有して学びの喜びをもつ経験（したクラス）は、総合でも行事の中でも成長していける。

○パネルは、内丸先生、曾根先生、渡邊先生という素晴らしい人選で、その議論でも実践でも、先進の経験からの発言が大変参考になった。各自の地域、環境によりすべてを真似することはできないが、考え方を学んで自分たちの実践に生かしていけるようにしたい。

《これから先の国語教室》

○本日の発表は、どれも、授業の主体者が、教える先生側ではなく、学び手の子どもたちの自覚を育てて、学びをつくる子どもたちを育てようという実践だった。私達は、授業の主体である子どもたちの視点から、授業を見ているのか、九月からの単元をもう一度見直してみたい。学び手としての自覚は、低学年のうちから素地を育て積み上げることが大切。

どの教科書にも「単元のとびら」が入った。「つきたい力」も明示されているので、子どもとともに、どう学ぼうかと話し合う時間に活用したい。

・授業計画を立てる上で、教師はさまざまな調整役になる。相手は子ども、学年、学校全体。広い視野でのカリキュラムマネジメントが必要。教師自身が、「ICT」を使うことで逆に忙しくならないように、何のためにどのツールを使うのか、無理のない選択ができるとうい。

・変わらないものは教材研究。子ども同士による相違点だけでの話し合いで終わらせず、立ち止まり、一步深める授業にするためには、教師も学び手の人になって参加すると良い。

・今回のオリンピックは良い教材になる。ドローンを使いこなす高度な技術と同時に、ピクトグラムを人が表現したことが評価されたのはなぜか。授業でも、「ICT」の技能を高めるだけではなく、人と人とのつながりを大切に、肌感を忘れてはいけない。一方で、メディアリテラシーや知的財産権について意識をもてる子どもを育てるために、私たちが勉強する必要がある。

○この会の理念である「吾以外皆我師」の考え方が、子ども同士にも芽生えて欲しい。協働する子ども同士が、お互いを認め合う心を育てて学級を作っていくきたい。

【記録】 小野澤 由美子（東京）

6 閉会式 一五〇五〇～一六〇〇〇

・ 会代表挨拶 安田 恭子（東京）

・ 参加者代表挨拶 大木 圭（千葉）

・ 大会連絡 若林 富男（東京）

◇◇ 会案内 ◇◇

日本国語教師の会「樺の会」の研究でめざすもの

日本国語教師の会「樺の会」は、二十一世紀の国語学習の在り方の探求する研究集団である。

子どもたちが「自ら国語の力を獲得する学び」の姿を求めて、東京、千葉

埼玉、神奈川、茨城から会員が都内の会場校に集まって来る。若手から中堅、そしてベテランまで、幅広い層の教員が、常に三十名近く参加する。

『研究は厳しく、人間関係は和やかに』を合言葉に毎月一度集まり、互いに学び合っている。二〇二〇年七月には月例会が記念すべき五〇〇回となった。

日本国語教師の会「樺の会」は、故石田佐久馬代表の遺志を引き継ぎ「吾以外皆我師」をモットーに学び続けている。月例会で学んだことをもとに、日本

国語教師の会「樺の会」の全国大会（毎年七～八月）で、発表する会員も多い。近年の日本国語教師の会「樺の会」の夏の大大会（通称全国大会）の研究テーマや開催地を掲げると、次のようになる。

二〇一六年 第五十二回茨城取手大会（茨城県取手市）

ことばを育て人間を育てる ～自ら学び、みんなで学ぶ国語の教室～

二〇一七年 第五十三回伊豆熱川手大会（静岡県東伊豆町）

ことばを育て人間を育てる ～国語科における「深い学び」とは～

二〇一八年 第五十四回宇都宮大会（栃木県宇都宮市）

ことばを育て人間を育てる ～学び続ける主体を育てる国語の教室～

二〇一九年 第五十五回横須賀大会（神奈川県横須賀市）

ことばを育て人間を育てる

～主体的・対話的に学びを深める国語の教室～

*二〇二〇年はコロナウイルス感染拡大防止のため開催中止

日本国語教師の会「樺の会」の会員は、全国大会のテーマを常に意識しながら、自分で興味関心のあるテーマを設定し、授業実践を通して追求し、年一回月例会で提案することを申し合わせている。

◇◇ 次回予告 ◇◇

第五十七回 日本国語教師の会「樺の会」千葉大会

二〇二二年八月六日（土）七日（日）千葉市で開催予定

大会委員長 大木 圭 大会事務局長 青木 大和